



論文

Expressing Sexuality among Chinese Women : Through Writing Female-Oriented Online Pornographic Novels

Lisa YUN

(Doctoral Course, Graduate School of Kansai University)

This study examines the practice of Chinese women writing female-oriented online pornographic novels, interpreting it as a meaningful form of sexual expression within a highly regulated sociocultural environment. Since the 2010s, writing such novels online has become relatively widespread among Chinese women; however, state-imposed restrictions remain stringent, and deeply rooted gendered double standards continue to make it difficult for women to express sexuality.

Employing in-depth interviews, the research frames these women as “producers of media and culture” and investigates their creative practices and the significance of their work.

The findings indicate that, for Chinese women, writing female-oriented online pornographic novels under conditions of oppression serves as a meaningful cultural practice. Through these novels, women create spaces for self-expression on the internet, thereby visualizing sexual subjectivity and constructing new styles of sexual representation. At the same time, they navigate tensions between internalized gender norms and external societal restrictions, challenging and negotiating existing norms. Furthermore, the writing of such novels functions as a co-creative cultural practice that fosters solidarity among women beyond individual desire.

「性」を表現する中国女性たち ―女性向けネットポルノ小説を書くことをめぐって―

憚 麗莎

(関西大学大学院 博士後期課程)

1. はじめに

1) 研究背景と目的

従来、「マスターベーションのための性表現」(守 2010)であるポルノグラフィは男性中心のものと論じられてきたが、近年、「女性がつくり楽しむ男性同士の性愛物語」(石田 2008)である BL (Boys' Love) を代表とする女性向けポルノ作品が、マンガや小説などさまざまなメディアを通じて世界中に広がっている。さらに、デジタル時代の到来により、女性が主体的に性を表現し、消費する場が大きく拡大している。中国でも、2010 年前後に女性向けポルノのブームが到来したが、それに伴い性表現に対する取締りも強化された。本論は、規制の下でネットポルノ小説というメディアを通して性を表現する中国女性と、彼女たちの活動を考察していく。

1990 年代末、インターネットの普及にともない、中国でネット小説が発展し始めた。初期のネット小説は主に男性読者を対象としていたが、2003 年に小説専門サイト「晋江文学城」が設立され、女性を主な作者・読者とする女性向け小説に特化したプラットフォームとして発展し、中国人による女性向けネットポルノ小説も流通し始めた (Feng 2009)。2010 年代に入ると、女性向けネットポルノ小説の出版も急増し、『逆襲』、『上癮』などの BL 作品はネットドラマ化され、爆発的人气を獲得した。これらの作品には、女性たち自身の視点で性・欲望・恋愛感情が描かれ、ネット小説は中国の女性たちが主体的に性を表現する場として発展していった。

その一方で、2015 年以降、取締りが強化されていく。2016 年頃に BL ネット小説を原作とする映像作品が配信中止となったことを契機に、露骨に性愛を描く作品はほぼ封じられた。さらに、2018 年 12 月、女性向けポルノ小説を出版したことによって作者の天一 (筆名) が「わいせつ物伝播罪」および「製造・販売わいせつ物罪」で起訴され、10 年半の懲役刑を受けた¹。天一が刑罰を受けたことは、表現を封じるはずの規制が逆に社会的関心を高める結果となり、中国における女性の性表現の自由と限界を可視化した象徴的事件となった。この「天一案」のように、女性向けポルノ小説を創作や発表したことで取締りの対象になった事件は 2015 年以降止まることがない²。女性

1 “天一案”：「耽美作者“天一”案中的罪与罰」新京報 2019.01.04 (2021.3.20 閲覧) <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1621733433468234318&wfr=spider&for=pc>

2 「中国数十名“耽美小説”作者据報被跨省抓捕 多人被判刑」聯合早報 2024.12.22 (2025.1.10 閲覧) <https://www.zaobao.com.sg/realtime/china/story20241222-5633380>



作者が逮捕や罰金の対象となる事件は男性作者より多く、科される刑罰もより重い傾向がある。女性向けポルノには見せしめの取締りが行われているのかもしれない。

このように、中国社会において、男性向けコンテンツと女性向けコンテンツには非対称性が存在している。「起点中文网」を始めとした男性向け小説専門サイトでも性描写に対する審査があるが、ルールが相対的に緩く、下ネタが多い作品でも売上ランキング上位の人気作となることがある。これに対して、「晋江文学城」などの女性向け小説サイトでは「首以下の愛撫」がすべて禁止されている。ネット小説だけではなく、中国の現代文学でも、性描写は多くの場合男性作家の視点から書かれ、女性の性は客体化される傾向が強い。女性作家が自らの性と欲望を表現した『上海ベビー』などの作品は発禁処分となった。これは、中国において男女の性の二重基準が根強く、女性による主体的な性表現が強くタブー視されていることを示している。

規制が強まる中で、それまで中国本土のウェイブサイトでポルノ小説を読み書きしていた女性たちは、台湾や海外のサイト—例えば、英語圏の小説アーカイブ「AO3」や、サーバーが台湾にある「海棠文化線上文學城」・「PO18」などの女性向けポルノ小説専門サイトなど—に活動の場を移動していった。投稿されたネットポルノ小説の題材も多岐にわたり、男性同士の性愛を書く BL だけでなく、男女の性愛を書く BG (Boy and Girl Love) などもある。

ネットポルノ小説は無料で読める場合が多く、サイトに小説を投稿する際に有料に設定したとしても、生計を立てるほどの収入は得られない³。たとえネット上で人気を集めても、中国でポルノ作品を出版することは困難である。つまり、小説を投稿する女性の多くは、収入のためではなく、単純に趣味としてネットポルノ小説を書き、投稿していると考えられる。

本論は、インタビュー調査を通じて、ネット上でポルノを書く女性に焦点を当てる。彼女らはどのように自らの表現の場を作りあげ、ポルノを書いているのか。何のためにポルノを書いているのか。また、ポルノ小説を書き読む女性のアイデンティティや、ポルノ小説に関する活動を通じた女性たちの「共同体」の様相を分析し、デジタル時代においてポルノ小説によって性を表現することは女性たちにとっていかなる意味をもつのかを明らかにする。

2) 女性がポルノを書くことについての研究意義

なぜ女性がポルノを楽しむことはいまだに自由ではなく、男女の非対称性が顕著であるのか。守如子 (2010) は、女性がポルノを創作・消費することは、男女の性の二重基準を侵犯するがゆえに、批判される可能性があることを指摘している。性の二重基準とは、男性向けの性道徳と女性向けの性道徳とが異なっていることを指している。これは、近代社会において、男が男として性的に主体化するため、「女性の性欲は受動的で男性に依存する」という形でだけ位置付けられたことに始まることが分析されてきた (小田 1996)。これに対し、女性向けポルノの研究者は、女性向けポルノが女性の性的主体性を見出す表現であることを論じてきた。例えば、金田淳子 (2007) は、女性のために描かれた「ヤオイ (= BL)」の性表現が、性の二重基準への抵抗として女性の性的欲望を肯定していることを指摘している。守如子 (2010) はポルノコミックの女性読者の要望を考察し、

3 小説専門サイトには課金システムがあるが、その収益は非常に少なく、「海棠文化線上文學城」を例とすると 5000 字で 1.3 ニュー台湾ドル = 6 日本円しかかからない。

女性向けポルノは女性自身が性的な表現を享受し、また能動的に求めてきたものであると論じている。一方、中国では、女性向けポルノ研究においても、性表現そのものを主題とするのではなく、BLに焦点を当てる傾向が強い。研究の着眼点としては、BLのヒット作品の内容分析や、BLをとりまく環境などがあげられる（周 2024 など）。

このように、既存の女性向けポルノ研究の多くは、可視化されたテキスト上の分析に重点が置かれ、実際に性を表現する女性たち―女性向けポルノの書き手―の存在が見落とされてきた。例えば石田美紀は、竹宮恵子や中島梓などの作家と雑誌『JUNE』に焦点を当て、1970年代に遡り、BLという新たな性愛表現の誕生と展開を論じている（石田 2008）。しかし、石田の研究のように歴史を遡るものはあっても、現在の書き手に焦点を当てた研究は依然として少ない。

「書き手」にアプローチするため、フェミニズム理論と文学研究における「女性と書くこと」に関する知見を参照する。ヴァージニア・ウルフ（1929 = 2015）は『自分ひとりの部屋』において、女性が文学界で抑圧され、評価されにくかったことを指摘し、女性が文学的欲望を持っても発展させる環境がなかったことを描いている。また、日本における近代女性文学をめぐる議論では、女性作家は、文学の生産者ではなく消費者であることを要請され、文学の場から排除されてきたことが指摘されている（小平 2008 など）。また、守如子（2010）は、女性は性欲がないのではなく、「自分の性欲を表明する場がない」と指摘した。時代の発展やメディア環境の変化により、現代の女性たちは「文学的欲望」や「性欲」を「表明する場」を持ちうるのか、彼女らにとって「表現する場」がもつ意味を明らかにするためには、新たな研究が必要である。

また、カルチュラル・スタディーズ研究者 Dobson（2015）はポストフェミニズム時代のデジタル文化において、「選択と行為主体性」が女性の生活、メディア実践を理解する鍵となり、女性をメディアと文化の生産者として真剣にとらえる必要性を指摘する。フェミニズム学者ピーブマイヤー（2011）は若い女性たちを単なる文化の消費者ではなく自ら文化を生み出す者として位置づける一方で、女性による草の根的なメディア実践は、既存の規範に抗しながらも、同時にその規範に影響されるという両義性を抱えていることに注目する。

女性たちによるコンテンツの生産・流通はこのように複雑な現象である一方で、オンライン空間における表現行為とジェンダーの関連は、日中の研究ともに、まだ十分に検討されているとは言い難い。本論は、従来の研究の限界をふまえ、デジタル文化の中で女性がどのように「表現の場」を獲得し、創作活動を行っているのかに焦点を当てる。ポルノを書く女性を「メディアと文化の生産者」として捉え、どのような文化を生み出しているのかを明らかにすることで、ジェンダーと表現に関する研究の領域において新たな知見を提示していきたい。

3) 調査方法と対象

中国において、ポルノを書くことおよび伝播することは原則として法律に違反するため、書き手の情報を大規模に収集することは困難である。また、「ポルノを書く」女性の主観的な意識と活動の実態を把握するうえでも、研究方法として半構造化インタビュー調査が適している。

中国のネットポルノ小説の作者は読者や同好者を誘ってオンラインチャットグループを作っている。グループはネットポリスを防ぐため、参加に障壁を築く様々な規則を設けている。これまで筆者は、ネットポルノ小説の女性読者について調べるために、2021年の12月から2022年の12月に



かけて、参加と調査を管理者やメンバーに許可された5つのチャットグループに参加し、インタビュー対象者を募ってきた。ただし、女性に性に関することを尋ねるのは容易ではなく、インタビューを拒否されたケースも少なくなかったため、調査対象者には知人からの紹介も含まれている(Cさん、Fさん)。インタビューを進める中で、ポルノを読むだけでなく書いている女性が少なくないことが明らかになった。そこで、書くことの意味を検討するため、2022年6月から2025年2月にかけて、6名の女性にポルノ小説を書くことについて更にインタビューを依頼した。6名のうち、インタビューを引き受けてくれた人は4名いた(表1)。インタビュー調査は調査対象者と1対1で、承諾を得てメモを取り録音しながらビデオ通話で行った。各回の調査時間は1時間半から3時間程度である。

表1 インタビュー対象者(初回インタビュー実施順)

	年齢	学歴	職業	出身地	インタビュー実施日
A	20代	修士課程在学	大学院生	広西	2022.06.21
B	20代	専門学校在学	美術専門学校学生	西安	2022.08.20/2023.10.03
C	20代	修士課程在学	大学院生	安徽	2022.08.26/2023.09.27
D	20代	大卒	会計士	湖北	2022.08.27/2023.11.27
E	20代	大卒	営業職	湖南	2022.09.09/2025.02.26
F	20代	大卒	ゲーム運営	遼寧	2024.11.17

2. ポルノを表現すること

1) 表現する場

中国における女性向けポルノに対する取締りは非常に厳しい。このような状況で、女性たちはいかにして制約の壁を乗り越え、「性」を表現しているのか。まず、女性たちがどのようにポルノを書いているのか、表現する場についての代表的な意見を挙げてみよう。

Aさん：ポルノ同人(注：「同人」は中国では二次創作を指す)小説を書いたことがある。5、6篇くらいで、Lofter⁴に載せて、性描写の部分はAO3(英語圏のサイト)に投稿した。

Bさん：オリジナル小説や同人小説をあわせて20篇以上書いてきた。QQ空間(LINE VOOMの機能に類似)やweibo(Xに相当)に、フォロワーにしか見えない形で載せた。

Eさん：短いネタならば100篇はこえているが、小説と言える文章はたぶん30篇ぐらい。自分のweiboにアップしたり、wechatグループを通して、同好の子にシェアしたりしている。PO18(台湾のサイト)やAO3で連載した長い小説も3、4篇ある。

これらの語りを見ると、ポルノの公表が非常に困難である中国において、女性たちはさまざまな手段を利用して、「性」を表現し、表現の場を作り上げていることがわかる。まず、一部の調査対象者は中国本土のSNSを利用し、「フォロワー限定公開」やクローズドなオンラインコミュニ

4 「Lofter」はブログ形式の中国のソーシャルメディアである。Lofterに二次創作を投稿するファンも多いが、規制が厳しいため性表現が含まれない部分しか投稿されないことが多い。

ティへの投稿などによって創作活動を行っていた。制限がある中国の SNS も活用することによって、プラットフォーム側の検閲を相対的に回避しつつ、女性たちは自らの表現の場を確保している。また、これは、規制を回避するためだけでなく、読者からの人気と評価を獲得するためでもある。SNS では作者からも読者間でもポルノ小説の情報を広めることができる。SNS の機能を利用し、女性たちは作品に対する感想や評価を交流していた。そして、海外の投稿サイトも一部の書き手に利用されている。中国の女性たちは海外へのアクセスという技術的な障壁を克服しながらも、海外のより開かれた表現の場を自ら開拓している。以上のように、女性たちは中国国内の規制を回避するため、国内外のプラットフォームを使って、ポルノ表現の場を自ら作り上げていた。また、これらのプラットフォームは単なる創作の場にとどまらず、作品を広げ、女性たちがコミュニケーションする場としても機能していた。

2) 表現したいこと

女性向けポルノ小説を書く中国女性たちは、ポルノ小説を通じて何を表現したいのか。女性向けポルノは、彼女たちにどのように捉えられているのか。調査対象者全員がポルノ小説の最も重要な要素は性描写であると考えているが、性表現そのものを志向する人と、愛を表現する手段とみなす人という、異なる二つの指向性があることが見えてきた。

C さん：押しアイドルのセックスを具象化するため、ストーリーを一応書いている。前振りがなくセックスがイキナリ来ると、ちょっと面白くないと感じるから。……ストーリーはぜんぜんうまく書けない。それより、ストーリーを作ることにあんまり興味がない。例えば言えば、私はタレのために、餃子を作った（笑）。

C さんは、セックスを「具象化」することを目的としてポルノ小説を書いた。つまり、彼女にとって最も重要なのは、「タレ」＝性であり、「餃子」＝ストーリーやキャラクターの関係性は性的なイメージを表現するための手段にすぎない。

B さん：ポイントはやっぱり性描写でしょう。でも、キャラクターの個性やストーリーの発展にふさわしいセックスシーンをちゃんと考えなくちゃいけないと思う。セックスを書くときは、性欲を喚起させると同時に、美しい雰囲気を感じられるシチュエーションを読む人に作ってあげたい。恋愛についての描写やストーリーがない純肉小説⁵は読もうという興味もわからない。

F さん：先にセックスシーンの断片が頭に浮かび、その後に前後のストーリーを作り始める。……セックスの部分は比較的書きやすい。普通のネット小説には制限があって親密なシーンが描けないから、キャラの関係性や感情変化を表現するのが難しく、時にどこか足りないと感じる。私にとって、良い性描写とは、エロティックでありながら猥褻ではないもの。

5 中国のネット上で「肉」は性描写を指す。中国では、セックスシーンばかりで、恋愛や物語の展開などがほとんど存在しない小説を「純肉小説」や「純肉文」と呼ぶ。



一方、BさんとFさんは、性描写をキャラクターの関係性や感情の変化を表現する手段として捉えている。Cさんにとってポルノ小説は性を表現する媒体であるのに対し、「猥褻ではない」や「美しい雰囲気」を強調するBさんやFさんにとって、「性」を通じて最終的に表現しようとするものは、「愛」や質の高い作品を表現することなのである。

なぜ一部の女性は性を表現するとき、「愛」を強調するのか。性表現に対する規制が厳しい環境で、「愛」や美しさを強調し、社会問題化されたポルノと区別することは、批判を回避し、創作を続ける戦略であると捉えることができる。「私の作品」は「わいせつ物」ではなく、「物語としての価値がある」「恋愛の一部である」とすることで、承認を得たり、表現の場を確保したりすることを容易にさせたいという意識が伝わってくる。また、性を「愛」と結びつけることは、性規範と関わっていると考えられる。性の二重基準によって、女性の性欲はないか受動的なものとされている。BさんやFさんが愛を強調しているのは、性表現を正当化しようとする意識の表れではないか。一方で、「愛」より「性」に重点を置き、直接的に性欲を表明するCさんは、従来の女性の性欲をタブー視する性規範からの逸脱の表れであるとも解釈できる。このように、一部の女性は主体的に性を表現する際にも、性の二重基準という規範が内面化されることを免れない可能性があり、女性の性的主体性をめぐる複雑さを示している。

「メディアと文化の生産者」(Dobson 2015)としての書き手の女性たちは、既存のポルノをどのように捉え、どのような新しい文化を生み出そうとしているのか。

Bさん：女性向けポルノ小説にとって前戯や後戯が本当の「本番」！前戯や後戯には様々なプレイの描写が展開される。挿入する性交の描写はほとんど同じパターンで、マシンのようにサーキュレーションしていて、つまらないと思う……セックスした後で、二人がイチチャイしたり、余韻に浸っている描写が好き。

Dさん：男の作者は男性の性器を誇張して描写したり、フェラチオや挿入することばかり書いている。男性が射精に至ると、賢者タイムに入り、そのまま終わってしまう。これではぜんぜん気がすまないし、女性が道具のようだと感じてしまう……女性向けポルノはだいたい性交する前の愛撫から最後のピロートークまでちゃんと書いていて、「受け（受動側）」の気持ちもケアされて、「攻め（能動側）」の感情も伝わってくる。

BさんとDさんのように、多くの対象者はインターコース前後の行為の描写の重要性を強調している。Dさんが述べるように、従来の男性向けポルノの多くは挿入行為を重視していて、その表現を誇示している。そのような表現が女性の性体験を周縁化し、「性的な道具」のように女性キャラクターを描くことに繋がっている。女性の書き手たちはこのような男性の体験だけを重視し、挿入行為ばかりを描写するパターンに反感を持っていて、「前戯や後戯が本当の「本番」！」と唱えている。ここに女性たちによる男性中心的なポルノの構造への抵抗が示されているのではないか。彼女たちにとって、女性の性は受動的で男性に依存するわけではなく、女性の身体は男性の性欲を満たすためのモノでもない。女性たちはポルノ小説を書くことを通じて、性的主体性を表現し、セックスを自分が喜ぶためのものとして再定義しているのである。

また、対象者たちは性交前後の「イチチャイチャする」描写を強調し、セックスシーンは単なる性交行為ではなく「気持ちを伝える手段」だと語った。彼女たちがポルノを書く際、性的な刺激に

加えて、キャラクターの交流や関係性の構築に配慮していると考えられる。このように、書き手の女性たちは、従来の男性向けポルノを模倣するのではなく、自らの欲望や価値観に基づいて新しい「物語」を作り上げている。この過程は周縁化された自分たちの文化の定義と意味の再構築であり、女性向けポルノ小説は意味を生み出すための生産の手段であるといえる。

3. ポルノ小説を書く理由

現在の中国ではポルノ作品は出版できない。ポルノの創作には時間かかる上に、お金や名声などのものは生みださない。それなのに、なぜ女性たちはポルノを書くのか。

Fさん：最初はネットで女性向けポルノ小説を読んで面白いと思い、それらを真似して夢女子文⁶を書いて、クラスで回し読みしてた。今はBLオリジナル小説を書くことが多くて、連載したこともある。でも、短編のものが一番多い。そういうのは公開せず、小説サイトの下書きに保存している。ただ“脑洞”を記録しておきたいから。

書く理由について、一番多く語られた言葉が“脑洞を記録する/埋める”である。調査対象者全員が“脑洞”という言葉に言及した。“脑洞”とは、「脳補（脳内補完）」から派生した言葉で、脳内の穴＝妄想を指す。その“穴”を埋めるために女性たちは自らポルノ小説を書いているが、なぜ彼女らの“脳内に大穴が開いている”のか。

Aさん：アニメの推しカップルはあんまり同人、特にポルノ同人がなかったから、自分で書いた。キャラクターたちに原作と違う行動をさせて、新しいストーリーを展開させて、自分の創作の欲望や推しカップルに関わるファンタジーを満たした。

Aさんのような女性は、好きな作品や推しキャラの二次創作物が少なく、自分の妄想を満足させることができないので、自分の「想像を再現する」ために自ら「新しいストーリーを展開」したと述べている。

Bさん：他人の小説を読む時、つねにどこか足りないと感じる。自分で小説を書くと、頭の中のキャラクターが自分の思うとおりに動き、生きている感じになって、とても満足した。

Cさん：現実では、恋愛や性関係にならないアイドルたちが小説を通して性愛関係で結ばれ、自分の思い通りに動くなんで、考えただけでもドキドキしちゃう。

Dさん：夢女子文って、だいたい自分を投射していることが多いから、もし自分なら、原作の男性キャラと、どのようなストーリーが展開されるのか、自分も読んでみたかったから。

BさんとCさん、Dさんは、他人のポルノ作品を読むことだけでは満たされない、ストーリーやキャラクターを「自分の思い通りに動かしたい」という欲望を表明した。ポルノ小説を書くことを通して、女性たちは自分のファンタジーや欲望を満足させている。これらのファンタジーには、

6 「夢女子」は二次元やアイドルなどの男性キャラクターと自分（または自分を投影した架空のキャラクター）の恋愛物語を夢見る女性、「夢女子文」はそれを描く二次創作を指す。



現実において女性たちが実現できない性欲や感情が投影されている。キャラクターや関係性を自分の思い通りに動かすことには、現実世界で満たされない支配欲も関わっている。

ほとんどの人が、Fさんのように「他人の小説を読んで模倣する」ことから始めたが、今やそれだけでは満足できなくなり、BLならば「男同士の友情」を「男同士の性愛」に、夢女子文ならば男性キャラクターと自分自身との関係に書き直している。このような実践は、「すでに存在しているものを自分の思い通りに使って別の何かを作り出すような」「不順従な創造力」（東 2015）と解釈できる。この「不順従な創造力」は、女性たちに、異性愛中心主義や女性を受動的な存在として位置づける性の二重基準に抵抗・交渉する力を与えている。女性がポルノを書くことは、単純に快楽や満足を得るためであっても、従来の性規範やジェンダー秩序を書き直すことにも繋がっている。

ポルノ小説を書くことには、「自分のファンタジーや欲望を満足させる」という欲求だけではなく、創作という活動を通じた自己表現・自己肯定の欲求も見られた。

Eさん：AIを使ってアイドルのポルノ同人小説を生成してみたこともあるが、一目で偽物だと分かった。でも、自分で文字を操ると、とてもリラックスでき、アイデアが形になっていくのがとてもスッキリした。……投稿して読む人に褒めてもらえたら嬉しいけれど、たとえ誰にも読まれなくても、自分が満足できればそれでいい。

AIによって、人々はより簡単に頭の中にあるアイデアを形にすることができるようになった。Eさん同様、FさんとDさんもAIを使ってポルノ小説や同人イラストを制作した経験があると述べた。しかし、彼女らは、AIによる生成物に対しては満足感を感じていない。自分の手で「文字を操り」、主体的に「表現していく」という行為自体が彼女たちに満足感や達成感を与えていた。また、「誰にも読まれなくても」という語りは、逆説的に、欲望を不可視化されてきた女性たちにも性欲を語りたい、表現したい欲望があることを示している。ただ、これまでは女性たちが表現の場やツールを欠いていたにすぎないのだろう。

「恥を恐れず」「制約を顧みず」、女性たちが自らの欲望を自覚し、それを書いている。このように主体的に自らの文化を創出している女性たちは、単なるコンテンツ消費者ではなく、文化の生産者としての役割を担う存在といえる。

4. 書くことによって構築される自己像

1) 作者というアイデンティティ

では実際、ポルノを書く女性たち自身は、「自分」や「女性向けポルノ小説」をどのように捉えているのか。自分を「メディアと文化の生産者」と思っているのか。

Bさん：つまらないものでも、文章を書くときの私は当たり前まに作者だ。プロの作者だとは思ってない、小説を書くことで儲けてはいないから……昔から、小説や散文を読むことや書くことに興味を持ち続けてきた。プロの作者や編集者を目指した時期もあったけど、やっぱり難しいなあ。……ネットポルノ小説には、文学と言える作品もあるよ。そもそも、体裁に関わらず、文字には格差がないので、優秀な作品は優秀だ！

Bさんは、プロの作者ではないと自認しつつも、「書くこと」を通じて自分を「作者」と認識している。また、Bさんだけでなく、Eさんも「体裁に関わらず、ネットポルノ小説には、文学と言える作品もある」と語った。ポルノであるかどうかに関わらず、中国社会において女性向けネット小説は既存の小説よりも低く見なされている。しかし、Bさんのように、これらの女性は、形式やジャンルを超えて優れた作品は評価されるべきだと考え、女性向けポルノ小説の価値を主張している。一方で、自らを作者と捉えていない人もいた。

Cさん：自分が作者かどうか、一回も考えたことがなかった。しいて言えば、小説を投稿したこともあるから、作者といえるかな……でも、私は単純にセックスシーンを作りたい。文章を書くことが好きじゃなくて、文章もうまくかけない……知る限りのポルノ作品は文学と言えないと思う。ネット小説は誰でも書けるもので、人の作品をパクったものもたくさんあるから。さらに、ポルノ小説は市場に流通しにくいし、一般の読者に見せるものでもない。影響力もあんまりないから、文学になるのは難しいと思う。

Dさん：一般的な意味での「作者」とは思わない。私が書いたポルノの文章も文学と言えない……連載小説を書こうと一時は思ったが、自分は非凡な才能を持っていないと思うから、諦めた……ポルノ小説はただ作者自身の感情か性欲の投影で、特に美や文化を体現しなくてもいい。また、ポルノ小説に二次創作物が多いので、それは一般小説とは差もあると思う。

Cさんには「作者」であるという自覚はなかったし、Dさんも自分が「一般的な意味での作者」とは思っていなかった。二人以外も、「自分が「作者」とは思わない」(Aさん)、「自分の性幻想を形にしたもの」を書いている「愛好者」(Fさん)と自認していた。また、Eさんは「自分は自分の“脳洞”を他人にシェアする「共有者」で、いつか自分が本当に満足できる長編小説を完成させたとき、「作者」と自認できるかも」と語った。このように、小説を書いている、作者と自認していたのはBさん1人だけであった。なぜ彼女らは自らをネットポルノ小説の作者と自覚していないのか。それは、彼女たちにとって、「作者」は「才能を持ち」、「優秀な」「満足できる代表作」を書く人であるが、自分は「そこまでの才能を持たない」人だからだ。

また、「女性向けネットポルノ小説は「文学」のレベルに達しない」という語りからは、ポルノ小説を自ら積極的に書いているにも関わらず、一部の書き手はポルノ小説にある種のコンプレックスを抱えていることがわかる。例えば、CさんやDさんは、ネットポルノ小説は単なる性欲の投影であり、「美や文化を体現しなくてもいい」と捉えている。彼女らにとって、「文学」は敷居が高く、多くのネットポルノ小説は文学に高めていくことはできない。Dさんが言う「二次創作」というサブカルチャーは、メインカルチャーと格差があり、中国社会において低く位置づけられている。「ポルノ小説は市場で流通しにくく、影響力も少ない」という語りは、女性のポルノ創作が公的な場で評価されにくい現実を示唆している。ポルノを書く女性たちの実践は、表現としての自由を追求することでありながら、社会的な承認や評価を得にくいジレンマを抱えている。それも彼女らが「作者」と自認できない理由の1つと考えられる。

また、調査対象者の語りから、自分に自信がないというニュアンスも伝わってきた。Dさんだけでなく、EさんやOさんも「自分には才能がない」と述べた。また、Bさんのように、ほとんど



の人がそもそも書くことに愛好を持っていた。プロの作者や編集者を目指したり、ネットで長編小説を連載しようと考えたりしたこともあったが、儲からない、評価されないといった現実的な理由で、それを諦めてきたことがわかった。表現する欲望を抱えていても、それができない女性も少なくない。その背景に、性表現に対する制限だけではなく、女性が表現の場において自らを制限され、社会的に認められる「正しい」方法に従わざるをえないことがある。この「正しさ」が女性自身に内面化され、例えば自分の才能の有無を判定する基準となることで、自己肯定感に影響し、女性自身の発展を阻害しているのではないか。

2) 「女性」というアイデンティティ

ポルノ小説を書くことを通じて、女性たちは「女性である」ということをどのように捉え、女性たちにジェンダーに関するどのような新たな体験や感想が生まれているのだろうか。

Cさん：私自身の経験なんだけど、昔、少し性描写を含むアイドルの同人小説を自分の weibo に載せたあと、わからないけど、一人の男が検索してきて、いやらしいコメントを残した。気持ちわるすぎで、あの時期小説を書くことも嫌になった。この後投稿するとき、内容紹介の文字は絶対キスやハグなどの文字も避けて、変な男に検索されないようにしている。

Dさん：特に夢女子文を書く時、ずっと自分のことを反省している。私が書く文章は、男性に媚びているのではないか、ミソジニーなのではないか……ほかの女性たちが小説を書く時も、このような「反省」をしている人は少なくないと信じている。反省するのはよいことだが、創作が少し不自由になっていて、文章を読み書きすることが簡単に楽しめることではなくなっていると感じている。

Cさんは、自分のポルノ小説の投稿によって、男性からの嫌がらせを受けた経験を述べた。ネット上で女性はより自由に表現できる一方で、発信した女性に対してオンラインハラスメントが向けられやすいという問題がある。ミソジニーなどのジェンダー問題を認識してきたDさんは、文章を書くときにこれらの問題を意識するあまり、かえって創作の自由度が低くなっている。ここから、女性向けポルノの書き手がポルノ小説を書くとき、自分が「女性であること」を強く意識して、外部環境からの批判や不自由を常に感じていることがわかる。自己を守るために、女性の活動空間はどんどん狭くなっている。また、創作環境の厳しさや、常に自分のことを反省していることも、女性が表現することを阻害しているのではないか。

Dさん：女性のポルノ小説はこっそり書き読まれるが、男子向けAVはプラットフォームで検索してもたくさん見れる。女性を盗撮した動画もネットショッピングサイトで購入できる。これはまったく納得できない！

Dさんのように、多くの調査対象者が中国におけるポルノ規制の男女の非対称性を批判した。政府や企業による厳しい規制に対し、女性たちは自分の態度と考えをもっていた。ポルノを読み書くことによって、女性たちは政治的な思考を育んでいる。

中国特有の厳しい環境の中で、女性たちは、検閲をかいくぐりながらリスクを負って作品を創作、

発表している。この勇気のいる行為を通して、女性たちは自己の性的主体性や、社会規範との関係を批判的に考察する契機を得ていた。個人の自由と政治的制約の関係を自覚するなかで、権力構造に対する思考や抵抗の力を育んでいるのではないか。

3) 書くことによる女性の共創文化

中国で、ネット小説は「チャットの中で生まれた文学」と呼ばれている。ネットポルノ小説も、読者からのコメントと対話する中で執筆されている。ネットポルノ小説を書くことには、自らの性的幻想を表現するだけでなく、それらを読者と共有する、コミュニケーションの欲求も託されている。

E さん：アイドルのポルノ同人小説を書いたことによって、同じ CP（カップリング）を推す同好を見つけた。私たちは wechat グループで“脑洞”を共有して、私ともう 1 人が主にその“脑洞”を形にする役割を担っている。作り上げた「メシ」はグループに投下して、みんなで「一口かじる」感じ～（笑）

E さんは他人とコミュニケーションしながら、文書を書き続けている。調査対象者の多くがこのようなオンラインチャットグループに参加した経験を持っていた。E さんのような創作スタイルは、女性向けポルノ小説のチャットグループでは珍しくない。女性たちは互いに“脑洞”を交換し、それを膨らませた上で、一部のメンバーが執筆を担当する。つまり、女性向けネットポルノ小説を書くことは、単なる個人的な表現にとどまらず、女性の連帯を生み出す装置になっているといえる。互いに“脑洞”を共有し、それを発展させるプロセスは、女性同士が共創する文化を生み出し、創作を支え合うことによって、孤立した女性たちがつながり、交流や連帯を生み出している。また、女性たちは、ポルノの“脑洞”だけではなく、日常生活でなかなか話せない性体験や性的指向に関わる話題、そして学校からも家庭からも得られにくい性に関する知識も、こうした「性的妄想」を共有するコミュニティを通して語ってきた。このような性に関する私的な話題を分かち合うなかで、彼女たちは趣味や日常生活といった幅広いテーマについても交流し、仲間を見つけ、より広い範囲で心を開ける場を獲得してきた。

同じ関心を持つ女性たちが集まり、共通の欲望や価値観を語り合うことで、従来の社会的制約の中では得られにくい肯定感も生まれている。女性同士の共創活動やコミュニティは、他人から自分を認めてもらうことによって、自身の欲望を肯定し、互いに支え合う場として機能している。このような場はコンプレックスを抱えて、表現したくても、表現できなかった女性たちにとって非常に重要である。

このような「共通の関心を語る」コミュニティでのコミュニケーション活動を通して、女性たちは他の女性と結び付いている。オンライン上には女性を分断しようとする力が働いているが、ポルノを書くことは単なる創作活動にとどまらず、その力に抗い、女性たちが自らの声を上げ、社会的・政治的な変革を促す、ネット・アクティビズム（堀 2018）を育ててみている。



5. おわりに

本論は、中国において様々な意味で「不可視化」されているネットポルノ小説を書く女性たちの実態に迫り、厳しい規制の下で「性」を表現することの意味を考察してきた。分析を通じて、性の二重基準やジェンダーの非対称性、表現の自由に対する制約など、多様な側面によって、女性たちは、「性」からも表現の場からも、排除されてきたことが明らかになった。他方で、彼女たちは自ら表現の手段を模索し、限られた環境の中で性を表現する場を作り上げている。ネットポルノ小説というメディアを通じて、自分の欲望と幻想を記録し、性や愛を表現し、同好者とながっていた。

その結果、中国の女性たちにとって、抑圧の下で書き続けられる女性向けポルノは、単なる「マスターベーションのための性表現」だけではなく、自己表現の手段であり、性的主体性を可視化する文化的営みになっていた。女性たちは表現と規制の狭間の中で、自らの欲望や価値観に基づく新たな文化を生み出していることが明らかとなった。

まず、女性たちはネットポルノ小説を書くことを通じて、抑圧され周縁化されてきた欲望を言語化し、性的欲望や愛の幻想を可視化している。女性の書き手は前戯・後戯や感情交流を重視する物語や、異性愛という枠組みをずらすBLなどのかたちで欲望を語り直す物語を描くことで、従来の男性中心的な「挿入至上主義」で異性愛中心の物語を再定義し、新しい性的表現のスタイルを構築している。

その一方で、ポルノ小説を書きながら「愛」を強調する女性や、作者と自認できないと考える女性、自己反省している女性、書きたくても書けない女性も多く存在していることも明らかになった。彼女たちは、自己の内部の性の二重基準やジェンダー規範と葛藤しつつ、外部の厳しい規制や男性中心的な社会・文化構造と交渉しながら創作を続けている。このような実践は、既存の規範と対峙し揺さぶる営みでもあり、女性の性的主体性をめぐる複雑さを示している。

このような中で、女性たちをエンパワーメントしているのが、ポルノ小説を介して同好の女性が互いに結びついた、オンライン上の共創活動とコミュニティである。女性向けポルノ小説を書くことは、単なる個人的な表現にとどまらず、女性同士の連帯を生み出す活動ともなっていた。このような女性同士の連帯が、抑圧下でも表現を続ける力を与え、女性の欲望や主体性についての新たな議論を生み出しているとも考えられる。

書き手の女性たちは、ネットポルノ小説という周縁的な表現媒体を通じて、①欲望の可視化とポルノの再定義、②規範との対峙、③女性同士の共創と連帯という三つの文化を生み出していた。この文化的営みは、厳しい規制環境の中国において特に顕著に表れるが、同時に、Dobson（2015）やピープマイヤー（2011）が示すように、グローバルなデジタル文化に普遍的に広がりうる実践でもある。さらに、中国の女性書き手がリスクを負って作品を発表することは、ヘゲモニックな権力に挑戦する勇気のモデルを提示していると考えられる。この行為は、単なる表現や文化的実践に留まらず、政治的思考や抵抗の力を育む営為として理解できる。

以上の考察を通じて、本稿は女性が性を表現することの意義を明らかにし、規制社会におけるデジタル文化研究に新たな視座を提供してきた。しかし、具体的なテキスト分析や他国との比較を通じてさらなる検討が不可欠であり、これらについては今後の課題としたい。

参考文献

- 石田美紀『密やかな教育〈やおい・ボーイズラブ〉前史』, 洛北出版, 2008
- ウルフ, ヴァージニア『自分ひとりの部屋』片山亜紀訳, 平凡社, 1929=2015
- 金田淳子「マンガ同人誌 ―解釈共同体のポリティクス」『文化の社会学』佐藤健二・吉見俊哉 編, 有斐閣, 2007, 163-190 頁
- 小平麻衣子『女が女を演じる 文学・欲望・消費』, 新曜社, 2008
- 小田亮『性』(一語の辞典), 三省堂, 1996
- 周密『BLと中国 ―耽美をめぐる社会情勢と魅力』, ひつじ書房, 2024
- 東園子『宝塚・やおい・愛の読み替え ―女性とポピュラーカルチャーの社会学』, 新曜社, 2015
- ピープマイヤー, アリスン『ガール・ジン「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』野中モモ訳, 太田出版, 2011
- 藤本由香里『快感電流』, 河出書房, 1999
- 堀あきこ「〈からかいの政治〉二〇一八年の現在:メディアとセクハラ」『現代思想 特集=セクハラ―フェミニズムとMeToo』vol.46-11, 青土社, 2018, 178-189 頁
- 守如子『女はポルノを読む ―女性の性欲とフェミニズム』, 青弓社, 2010
- Amy, Dobson, *Postfeminist Digital Cultures: Femininity, Social Media and Self-representation*, New York, Palgrave Macmillan, 2015
- Jin, Feng, "Addicted to Beauty": Consuming and Producing Web-based Chinese Danmei Fiction at Jinjiang, *Modern Chinese Literature and Culture* 21 (2), 2009, pp.1-41.